

Title	ある文系中国人留学生の日本の大学院における学習経験 —エスノグラフィーを用いた縦断的調査—
Author(s)	郭, 菲
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/72433">http://hdl.handle.net/11094/72433</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 郭 菲 )	
論文題名	ある文系中国人留学生の日本の大学院における学習経験 —エスノグラフィーを用いた縦断的調査—
論文内容の要旨	
<p>本研究は、大学院における実践共同体への参加という観点から、中国人留学生（文系）の日本の大学院における学習経験を明らかにしようとするものであり、「はじめに」と「おわりに」を含め、9章から成っている。</p> <p>第1章「はじめに」では、本研究に至るまでの筆者の研究関心の変化する経緯と、調査者である筆者の留学生として日本の大学院での学習経験について述べた。筆者は自分自身が留学生として日本の大学院で学習する中で、実は専門知識以上の多くのことを学んでいるということに気づいた。そこで、留学生の日本の大学院における学習経験を全体的に捉え、留学生は日本の大学院でどのような経験をし、何をどのように学習するかということに興味を持つようになった。</p> <p>第2章「研究背景」では、日本の留学生受け入れと、中国の留学生送り出しの事情を整理した。まず、2.1では本研究の研究対象となる「留学生」の定義を定めた。次に、2.2では日本の留学生受け入れ政策の歴史の変遷、2.3では日本の留学生受け入れの現状について述べた。そして、2.4では中国の留学生送り出しの現状、2.5では在日留学生の中で最も人数が多い中国人留学生が日本を留学先として選んだ理由について述べた。</p> <p>第3章「日本の高等教育レベルの留学生研究」では、近年に行われた日本の高等教育レベルの留学生研究を、3.1専門教育、3.2留学生指導、3.3留学生の異文化適応、3.4アカデミック・ジャパニーズ、3.5ジェンダーに分けて概観した。</p> <p>第4章「理論的枠組み」では、本研究が学習ということ捉える際に援用する理論的枠組みについて述べた。まず、従来の研究で学習を捉える方法を簡潔に説明した。続いて、学習が生起する状況に注目する状況的学習論を導入し、学習というのは個人の頭の中ではなく、共同参加の過程の中に社会的相互作用を通して起こるものだということを確認した。その後、本研究が援用する状況的学習論の代表となるレイヴとウエンガー（1991/1993）の正統的周辺参加論（Legitimate Peripheral Participation）と実践共同体（Community of Practice）の概念がどのように定義されているか、そしてこの理論がいかに発展し、拡張されてきたかを述べた。最後に、正統的周辺参加論と実践共同体の概念を援用した高等教育研究の実例を取り上げ、この理論の高等教育研究における応用から、どのようなことが明らかにされてきたかをまとめた。</p> <p>第5章「本研究の位置づけとリサーチ・クエスチョン」では、まず先行研究を踏まえて本研究の立場を示した。先行研究の概観からわかるように、文系の中国人留学生が日本の大学院で何をいかに学習しているのかに関して、正統的周辺参加論や実践共同体の概念を援用して行われた研究は非常に限られている。しかも、数少ない研究の中でも、その多くはゼミのコメントセッションや、授業におけるアカデミック・インターアクションなどのような1つの授業における参加に焦点を当てている。しかし、1つの授業への参加は、日本の大学院に全面的に関わる留学生の学習経験のほんの一部に過ぎない。留学生の日本の大学院における学習経験という大きい文脈から、1つの授業への参加の一部分だけを切り取って焦点を当てては、留学生の学習経験を十分には理解しきれないと考えられる。従って、本研究は長期間に渡るリアルタイムの縦断的調査によって、文系の大学院留学生の大学院における学習経験を全体的に見るという立場を取った。続いて、日本の大学院の実践共同体への参加という観点から、中国人留学生（文系）の日本の大学院における学習経験を明らかにするために、本研究のリサーチ・クエスチョンを次のように設定した。①中国人留学生（文系）は、日本の大学院の実践共同体にいかに参加しているのか。②中国人留学生（文系）の日本の大学院の実践</p>	

共同体への参加に影響を与える要因は何なのか。③中国人留学生（文系）は、自分の日本の大学院の実践共同体への参加をどのように意味づけているのか。

第6章「方法論」では、本研究が用いた研究方法と調査の概要を示した。まず、本研究の方法論であるマイクロ・エスノグラフィーと、そのデータ収集方法である参与観察と半構造化インタビューを含めたフィールドワークについて述べた。続いて、本研究のフィールドの選定と調査協力者への協力依頼の手続きを説明した。その後、本調査では参与観察ができたフィールドの場面について紹介した。最後に、データとその分析方法、データの提示方法を記した。

第7章「Wさんのエスノグラフィー」では、本研究の協力者であるWさんの日本の大学院における学習経験をエスノグラフィーとして記述した。分析からわかったように、Wさんの日本の大学院の実践共同体への参加は、春学期と秋学期によって異なる特徴があったため、エスノグラフィーも7.1「Wさんの春学期」と7.2「Wさんの秋学期」に分けて記した。分析の結果、春学期には、Wさんは手探りながらも、授業を受ける中で自律性を発揮して徐々に勉強の仕方を学んだり、人間関係を構築したりしながら、日本の大学院の全体像を作り上げ、自分なりの大学院生としてのアイデンティティを構築したことがわかった。また、春学期のWさんの大学院の実践共同体における学習経験は、「自分なりの勉強の仕方を見つけ、専門知識を蓄積していく」、「人間関係に関する解釈の態度が変わっていく」、「研究室に行くようになる」、「学生間に存在するお菓子を分け合うという慣行に気づき、自分の行動を変えて行く」、「先延ばしを克服していく」、「役割モデルを発見する」、「TAとして授業で役割を果たす」、「期末に良い成績を取得する」という8つの要素としてみられた。一方、秋学期には、Wさんは指導教員のY先生の研究指導の下で、研究に実際に従事する中で挫折をしながらも研究を前へと進めていった。そして、研究という実践の中で日本の大学院に対する認識がさらに深まり、授業に積極的に参加する熟練者や先輩としてのアイデンティティを構築した。また、秋学期のWさんの大学院の実践共同体における学習経験は、「研究テーマを変更し、研究を楽しみに」、「先輩として振る舞う」、「研究で挫折し退学さえ考える」、「厳しい研究指導を理解し始め、研究とは厳密なものだと認識」、「自律的に研究を進めていくようになる」、「1人で気持ちを調整する」、「アルバイトで気分転換」、「指導教員との関係を再認識」、「受講生やTAとして授業に積極的に参加し、多く学ぶ」、「研究室メンバーとの関係を見直す」、「自分の研究の評価基準を見つける」、「就職方向を決める」という12個の要素としてみられた。

第8章「考察」では、正統的周辺参加論に基づき、Wさんの日本の大学院における学習経験を踏まえながら、春学期と秋学期に分けて、彼女の日本の大学院の実践共同体への参加に影響を与える要因について考察を行った。Wさんの春学期の日本の大学院への参加に影響を与えた要因としては、「参加の正統性と周辺性が十分に確保されていたこと」、「Wさんが自律性を積極的に発揮していたこと」、「役割モデルを発見したこと」、「Wさん自身は能動的に人間関係の構築に力を入れたこと」、「周りの学生同士の助けたこと」などがあることがわかった。一方、Wさんの秋学期の日本の大学院への参加に影響を与えた要因としては、「指導教員が行った研究指導」、「指導教員との食い違い」、「古参者である先輩がいないというゼミの構造の特殊性」、「Wさんの良い大学院生になり、良い修士論文を書きたいという強い願望」、「春学期の専門知識の蓄積」、「役割モデルを見つけ、弱点を補おうとする意志」、「TAとして授業に参加するチャンス」、「後輩の存在」、「彼氏と別れたこと」、「アルバイト先という別の実践共同体への参加」などがあることがわかった。

第9章「おわりに」では、9.1でリサーチ・クエスチョンへの答えを示した上で、留学生の日本の大学院における学習経験を理解する際には、学習をただ単に専門知識の習得としてだけではなく、日本の大学院への共同参加という観点から、留学生自身に関わる要素（性格、過去の経験、参加する意志）と留学生を学習に巻き込む社会状況の両方から理解する必要性を示唆した。最後に、9.2では、本調査を終えた後の視点から、筆者自身の日本の大学院の実践共同体への参加をもう一度振り返り、筆者の日本の大学院における学習経験を記述した。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 郭 菲 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 BURDELSKI Matthew
	副 査 大阪大学 准教授 高木千恵
	副 査 大阪大学 教授 渋谷勝己
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	



論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

ある文系中国人留学生の日本の大学院における学習経験

－ エスノグラフィーを用いた縦断的調査 －

学位申請者 郭 非

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 BURDELSKI Matthew

副査 大阪大学准教授 高木千恵

副査 大阪大学教授 渋谷勝己

【論文内容の要旨】

本論文は、正統的周辺参加論に基づき、マイクロ・エスノグラフィーを用いた1年間の縦断的調査を通して、日本の大学院で勉強するある中国人留学生（文系）の学習経験、彼女の学習経験に影響を与える要因、彼女の自分の学習経験に対する意味づけを明らかにしようとするものである。「はじめに」と「おわりに」を含め9章A4判194ページからなっている。第1章「はじめに」では、本研究に至るまでの筆者の研究関心が変化する経緯と、調査者である筆者の留学生としての日本の大学院での学習経験について述べている。第2章「研究背景」では、日本の留学生受け入れと、中国の留学生送り出しの事情を整理し、本研究の背景を示している。第3章「日本の高等教育レベルの留学生研究」では、本研究と緊密に関わっている近年行われた日本の高等教育レベルの留学生研究を、3.1 専門教育、3.2 留学生指導、3.3 留学生の異文化適応、3.4 アカデミック・ジャパニーズ、3.5 ジェンダーに分けて概観している。第4章「理論的枠組み」では、本研究が学習ということ捉える際に援用する正統的周辺参加論（Legitimate Peripheral Participation）と実践共同体（Community of Practice）の概念について述べた上、正統的周辺参加論と実践共同体の概念を援用した高等教育研究の実例を取り上げ、この理論を高等教育研究に応用することで、どのようなことが明らかにされてきたかをまとめている。第5章「本研究の位置づけとリサーチ・クエスチョン(RQ)」では、先行研究を踏まえて本研究の立場を示した上、本研究のRQを次のように設定している。①中国人留学生（文系）は、日本の大学院の実践共同体にいかに参加しているのか。②中国人留学生（文系）が日本の大学院の実践共同体に参加することに影響を与える要因は何なのか。③中国人留学生（文系）は、自分の日本の大学院の実践共同体への参加をどのように意味づけているのか。第6章「方法論」では、本研究が用いた研究方法であるマイクロ・エスノグラフィーと調査の概要を示している。続いて、本研究のフィールドの選定と調査協力者への協力依頼の手続きを説明している。最後に、データとその分析方法、データの提示方法を記している。第7章「Wさんのエスノグラフィー」では、春学期と秋学期に分け、本研究の協力者であるWさんの日本の大学院における学習経験をエスノグラフィーとして記述している。エスノグラフィーの中では、Wさんが大学院でできるようになったことをカテゴリー別に分けて時系列に沿って示している。また、協力者に対するインタビューのデータが引用され、留学生自身が自分の学習経験に対して与える意味づけが示唆されている。第8章「考察」では、正統的周

辺参加論に基づき、Wさんの日本の大学院における学習経験を踏まえながら、春学期と秋学期に分けて、彼女の日本の大学院における実践共同体への参加に影響を与える要因について考察を行っている。その結果、Wさんの春学期の日本の大学院への参加に影響を与えた要因としては、「参加の正統性と周辺性が十分に確保されていたこと」、「Wさんが自律性を積極的に発揮していたこと」「役割モデルを発見したこと」、「Wさん自身が能動的に人間関係の構築に力を入れたこと」、「周りの学生同士が助け合ったこと」などがあることがわかった。一方、Wさんの秋学期の日本の大学院への参加に影響を与えた要因としては、「指導教員が行った研究指導」、「指導教員との食い違い」、「古参者である先輩がいないというゼミの構造の特殊性」、「Wさんの良い大学院生になり、良い修士論文を書きたいという強い願望」、「春学期の専門知識の蓄積」、「役割モデルを見つけ、弱点を補おうとする意志」、「TAとして授業に参加するチャンス」、「後輩の存在」、「彼氏と別れたこと」、「アルバイト先という別の実践共同体への参加」などがあることがわかったとしている。第9章「おわりに」では、RQへの答えと今後の課題について述べている。また、本調査を終えた後の視点から、筆者自身の日本の大学院における実践共同体への参加をもう一度振り返り、筆者の日本の大学院での学習経験を記述している。

#### 【論文審査の結果の要旨】

本論文は、社会的・理論的背景、研究方法、データ分析、その解釈と考察が過不足なく丁寧に書き込まれており、論理的な議論が構築されている。先行研究のレビューにおいては、日本の留学生受け入れに関する政策の変遷や留学生の急増の現状、留学生に対する指導や彼らの異文化適応の背景、彼らの日本の大学院への適応や彼らに対するサポートや指導などの研究の重要性、研究方法論としての実践共同体及び正統的周辺参加論の妥当性が述べられており、申請者が幅広い正確な知識を持っていることが示されている。また、申請者は、女性の調査協力者Wさんを対象として、1年間に渡る対面による半構造化インタビュー、調査協力者が履修した授業の観察、及び、彼女の指導教員であるY先生とのオフィスアワーにおける修士論文のための研究などに関するやり取りを詳細に観察することによって、調査協力者の学習経験を、マイクロレベルとメソレベルの2つの社会的文脈によって詳細に描き出すことに成功している。そしてこの成果は、審査担当者が、調査協力者の大学院という制度的な実践共同体への参加の仕方やその変化をもたらす支援及び妨害の要因を深く理解することを可能にしている。

申請者は、エスノグラフィーで得られたデータによって、RQの答えを導き出し、説得力がある議論を展開している。論文のタイトルにある「大学院における学習」とは、価値観、能力、技能などは学習者の頭の中に存在する私的なもののみならず常に参加(相互行為)の中で現れる公的なものであるということを示したと言える。本研究は、現在大学院に所属する留学生の参加の仕方や指導教員による指導に関する知識を高め、留学生が大学院へ参加をする支援をどうしたらいいのかという議論および今後、ますます深刻化する留学生をめぐるサポートに対する議論に繋がるものであろう。

問題点としては次の二点が挙げられる。まず、第7章の分析は主にWさんと筆者という二人の視点から構築されたものであるため、Wさんの大学院への参加や学習などに大きな貢献をしたY先生に対するインタビューも行われていれば、第三者の視点も得られたのではないだろうか。二つ目は、Y先生にとってWさんが初めての指導学生であり、Y先生は指導教員としては新参者であったので、Y先生にも葛藤や成長があったであろう。即ち、Y先生の語りや視点を本研究のRQと方法論に取り入れていないことが惜しまれる。

しかし、これらの問題点はむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のもので、本論文の博士論文としての価値を減じるものではない。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。